

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K21436

研究課題名（和文）明治・大正期の童話・例話に現れた 良い子 像の研究

研究課題名（英文）A Study of Images of "Good Children" in Fairy Tales and Example Stories from the Meiji and Taisho Periods

研究代表者

坂本 麻裕子 (SAKAMOTO, Mayuko)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・准教授

研究者番号：40648317

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治・大正期の子ども向け出版物に掲載された童話・例話のエートス的、イデオロギー的意図を分析し、そこに現れた 良い子 像を考察した。考察する際は、学校教育と家庭教育の相互的影響関係を視野に入れた。明治22～25年頃を中心とした、子供演説テキスト群に現れた 良い子 像では、新たな「学校に通う子どもに求められる規範」が現れていた。『教訓仮作物語』（明治41年、文部省）に現れた 良い子 像では、貧しい環境下での労働と学校での学問を両立させる 労働倫理 であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の知見は、物語の中に出てくる「子ども」（良い子）がどのように描かれているかを捉えるという点で、近代日本の子ども観や明治時代の教育に関する研究分野に貢献するものである。また、本研究課題は、学校教育で使われた出版物と家庭教育で使われた出版物の相互的影響関係を視野にいれて分析することで、当時の状況を重層的に捉えようとした。この試みは、近代日本という新たな枠組みの下で生まれた子ども観や教育観の一端を明らかにするという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the ethos and ideological intent of fairy tales and Example stories in children's publications of the Meiji and Taisho periods, and examined the images of good children that appeared in them. The study also considered the mutual influence of school education and home education.

In the image of good children that appeared in children's speech texts mainly from the 22nd to 25th years of the Meiji period, a new "norm expected of children attending school" appeared. The image of the good child that appeared in the "Kyokun Kasaku Monogatari" (1908, Ministry of Education) was the "work ethic" of balancing work in a poor environment with study at school.

研究分野：明治期・大正期を中心とした、教育思想史および社会思想史

キーワード：明治時代の子ども観 『教訓仮作物語』 子供演説

1. 研究開始当初の背景

(1) 背景

研究代表者がこれまで行ってきた二つの研究¹では、修身教科書のテキストの変容から当時の国民教育における〈子どもの模範像〉を明らかにしてきた。

本研究課題では、これをさらに発展させ、学校の教育イデオロギーだけでなく家庭教育も含めた視点から〈良い子〉像（模範的な行動をしている子／示唆する子）を分析する。一次資料には、教科書だけでなく家庭向けメディア（雑誌や文庫）も含める。また、通史的に〈良い子〉像を捉えるため、分析対象時期を明治期と大正期に広げる計画である。

本研究課題のキーワードと分析対象の範囲について定義する。これまで本研究代表者が対象としてきた「童話」とは、主にグリム童話やイソップ寓話などを範囲としていた。しかし、「童話」とは一般的に子ども向けに書かれたお話を指し、さらには向川幹雄（1992）が指摘したように明治期には昔話の再話が含まれていた。その後、大正期になると創作童話を指す語となったのである。したがって、本研究における「童話」は、伝承童話と創作童話を含むこととした。また、先述の本研究代表者の研究からは、国定教科書以降（明治36年以降）の修身教科書では、子どもに模範を示唆する例話（作り話）や伝記の掲載分量が増えていくことが分かっている。修身教育イデオロギーを含む寓話・童話・昔話は、修身教科書から国語教科書や家庭向け読み物へと移行し、童話や例話に収斂していったと推察された。これを裏付けるように、府川源一郎（2014）も、「読み物」という観点から考察を行い、修身科と国語科のつながりの深さを指摘している。よって、本研究課題では童話と例話を分析対象とする。

(2) 先行研究での位置づけ

近代の〈子ども〉や教科書に関する研究には、一定の蓄積がある（牟田和恵 1996、日本児童文学学会編 1997、重信幸彦 2003）。例えば、教科書研究の代表的な先行研究に、唐澤富太郎（1956）の『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』が挙げられる。唐澤は国定修身・国語教科書（第1期/明治37年～第5期/昭和20年）に登場する人物を調査し、第5期で一番多く登場した明治天皇と二番目に多く登場した二宮金次郎を「理想的人間像」として分析している。しかし、唐澤の分析対象が主に伝記テキストである点、お話の主人公を大人と子どもで分けていない点において、〈子ども〉の理想像について十分に検討がなされたとはいえない。つまり、本研究は教科書のテキストに描かれた「子ども」を研究対象に、そこに現れる〈良い子〉を捉えるという点で、先行研究を補うものである。

また、知識社会学の立場から近代の〈子ども観〉を明らかにした研究として、河原和枝（1998）の『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』が挙げられる。河原は、『赤い鳥』（大正7年7月～昭和4年3月）に掲載された童話と童謡に現れた〈子ども〉のイメージを分析し、『赤い鳥』の〈良い子〉の多くが「欧米の近代市民社会型のモラルに同調する『良い子』として描かれている」（p. 102）ことを明らかにしている。その際、『少年倶楽部』（大正3年～昭和37年）の〈良い子〉が立身出世主義に沿っている点も指摘している（p. 107）。しかし、河原の興味関心は学校外の子ども向けテキストにあり、特に大正期の『赤い鳥』に現れた新しい〈子ども〉のイメージを明らかにすることに焦点が当てられている。当時最も読者が多く、子どもに影響を与えたと言える教科書には言及していない。この点で研究の余地が残されている。よって、本研究課題では、学校教育と家庭教育の各立場及び両者の相互的影響関係を視野に入れて〈良い子〉像を考察する。この立場は、先行研究で未だ取り組まれていない新たな視点である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的

本研究は、明治・大正期の子ども向け出版物に掲載された童話・例話のエートス的、イデオロギー的意図を分析し、そこに現れた〈良い子〉像を学校教育と家庭教育の各立場及び両者の相互的影響関係を視野に入れて考察する。ここでいう「子ども」とは、明治・大正期の小学校に通う年齢（6～14歳）を指す。一次資料は①明治・大正期の教科書に掲載された学校向けの童話・例話、②雑誌や家庭向け文庫等に掲載された学校外の童話・例話とする。（概要は図1を参照。）

図1 本研究の概要

本研究の目的	童話・例話に現れた〈良い子〉像を明らかにする。
分析対象の時期	先述した二つの研究を踏まえ、範囲を拡大し明治・大正期とする。
分析対象（一次資料）	①修身・国語教科書に掲載された学校向けの童話・例話 ②家庭向けメディア（雑誌等）に掲載された学校外の童話・例話
分析対象とする話材	童話（伝承童話・創作童話） 例話（子どもに模範的行動を示唆する作り話）
分析対象の背景資料	教育界及び民間の新聞・雑誌等に現れた子どもに関する論説 当時の知識人を中心とした教育思想に影響を与えた言説

(2) 本研究の意義

従来、童話や例話は、教科書史、児童文学史、知識社会学研究等の各分野で分析かつ考察されてきた。本研究課題の意義は1) 学校教育（修身科、国語科）と家庭教育の各立場及び両者の相互的影響関係という新たな視座から調査と分析を行う点、2) 童話や例話のエートスのテキスト分析を行う点にある。

3. 研究の方法

(1) 分析の方法

エートスに注目したテキスト分析の方法を用いる。これはマックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1989、岩波文庫）などで用いた方法を参照し、本研究代表者が独自に工夫を加えたものである。

- ①童話・例話の本文などのテキストから、当時の〈模範的な行動をしている子〉や〈子どもの模範的な行動〉を反映するキーセンテンスを抽出する。
- ②そこに含まれる道徳的規範—エートスを項目化し（例えば「労働」「家族」「愛国」等）、それに沿ってキーセンテンスを分類し、分析する。

①②で抽出し、分類などした分析結果を、当時の〈子ども〉をめぐるイデオロギーと関係づけながら、テキストの全体的な意味を考察する。当時のイデオロギーと関係つけて考察する意図は、当時の社会の背景にあるイデオロギー的動態も視野に入れて影響関係を見るためである。

(2) 資料収集方法と研究の手順

資料収集は、複数の図書館、古本屋等で、関係書籍を収集した。また、手順としては、以下のような作業を積み重ね続けた。

- ①様々な図書館所蔵リストから資料（修身教科書・国語教科書・家庭向け雑誌や文庫）の所在を確認する²。
- ②掲載内容の調査を実施する。（目次だけではわからないので、原本を読んで内容を確認する。）
- ③〈良い子〉が読み取れる童話・例話を探し、テキストを収集する。
- ④収集した資料を分析する。（学校内・学校外の各テキストに現れるエートスの比較）
- ⑤既に入手している同時代の著作や教育学者の言説と比較、考察する。
- ⑥教育界及び民間の新聞・雑誌等に現れた子どもに関する論説の収集と分析をする。
- ⑦当時の知識人を中心とした教育思想に影響を与えた論説の収集と分析をする。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

明治期、大正期の国定教科書（修身教科書、国語教科書）に掲載された童話、例話を収集した。家庭向けメディアに掲載された童話・例話を収集した。また、分析の背景資料となる教育界及び民間の新聞・雑誌等に現れた子どもに関する論説、当時の知識人を中心とした教育思想に影響を与えた言説も、関係する方面で収集を進めた。

特に、注目に値する成果は以下の通りである。学校の外に位置する家庭向け出版物に掲載された童話・例話と、教科書と家庭向け出版物の中間に位置する文献についての知見である。前者は①、後者は②で述べる。

①明治 22～25 年頃を中心とした、子供演説テキスト群に現れた〈良い子〉像

このテキスト群における模範的子ども像には、学校に通う〈良い子〉が現れており、〈立身出世〉エートスが中心であった。具体的には、以下の点がみられた。

明治 22～25 年頃、子供演説という形態の子供向け読物が多数発行された³。この読み物の特徴は、一話一話で登壇者である一人の子どもが聴衆に演説する形式で書かれている点である。読者（子ども）は演説を聞く聴衆の立場で、登壇者の演説内容をテキストつまり読み物として読む。これは、学校の外に現れた読み物で、家庭で読まれる出版物と位置づけられるといえよう。また、子どもの読み物と西洋から導入された演説（大人の流行）が結びついた出版物である。府川（2014）は約 30 冊の文献の存在を指摘した。

本研究代表者は、国立国会図書館デジタルコレクション（データベース）で「演説」をキーワードに検索し、明治期・大正期の子供向けに書かれたものを抽出したところ、現時点で 28 種類の文献が見つかった。例えば、『孝子演説』（明治 21 年）、『通俗教育演説』西森武城（明治 22 年）、『小児演説独稽古』榎木正太郎（明治 22 年）などである。これらを分析した。

子供演説テキスト群に現れた子ども像とはどのようなものか。娯楽の色も濃く、様々な内容が

書かれているが、教訓的な内容も多い。教訓的内容の傾向を現在整理中であるが、「〈学校〉での勉強を推奨する教訓（学校の意義、学校で学ぶ知識の生かし方、貧困な学生に対する勉強の鼓舞など）がみられ、その背景には〈立身出世〉というイデオロギーが透けて見える。一方で、親と子どもの関係については、教育勅語を思わせる「感謝」だけでなく、親が文字を知らなくても馬鹿にはいけないなどといった、学校に通う子どもを諫めるような教訓も見られた（『子供演説 修身教育』斯波計二、明治22年など）。学校に通う子どもの出現によって、親子関係に歪みが生じているともいえ、新たな「学校に通う子どもに求められる規範」といえよう。また、女の子に向けた演説内容では、学校に通うことのほかに、お手伝いの推奨などがみられた。ここからは、女の子に向けた演説の内容にも、新たな「学校に通う子どもに求められる規範」がみられるといえる。

「演説」という近代日本における新しい表現手段の枠組みを使ったテキスト群を取り上げ、明治20年代の学校の外にあるテキストの特徴の一端を明らかにした。（今後、論文として公開できるように準備している。）

②『教訓仮作物語』（明治41年、文部省）に現れた〈良い子〉像

大正期に向けて、学校教育側でどのような子ども像が現れてくるのか。その点を探るべく、いくつかのテキストを分析した。そのうちの 하나가、『教訓仮作物語』である。松山雅子によれば、この本は「国定教科書『尋常小学読本』（1910～1917）編纂にあたり、軍事強化と資本主義経済の伸張を標榜する日露戦争後の政府の意向を踏まえた新教材を発掘すべく、1906年文部大臣官房図書課が、高等小学校読本教材として各府県を通じて教育界を対象に作品を懸賞募集した。」⁴という経緯で出版された本である。14つの仮作物語が収められている。

「仮作物語」とは、「作り話」という意味である。文部科学省がふさわしい「仮作物語」を探る背景には、次の点があったといえる。明治期後期になると、国定教科書編纂に向けた議論の中で、子ども向けの教材「例話」として「嘘」の話（作り話の意）はふさわしくないという意見が見られるようになった。この議論では、「事実」のお話の具体例として伝記が挙げられ、「虚構」（つまり嘘）のお話の具体例としてグリム童話やイソップ寓話が挙げられる傾向にあった。例話は事実か、虚構かという議論は、国定教科書の編纂趣意書の表に収斂された。例えば、坂本麻裕子（2012, p. 136）は次のように指摘した。第二期国定教科書の修正を示す際には「事実ノ例話」という項目が設けられ、わざわざそれ以外として「イソップ物語」が分類された⁵。「事実ノ例話」の欄には「天皇陛下」や「二宮金次郎」などが列挙され、〈模範人物〉＝〈実話〉という認識が公式に形成されつつあった。そして、これ以降の編纂趣意書にも「事実ノ例話」の欄は存在し続けた。

このような背景もあり、当時、文部科学省はふさわしい「仮作」（虚構、フィクション）を模索していたのである。では、『教訓仮作物語』（文部省、明治41年）に選定されたお話に登場する子どもからはどのような模範像を読み取ることができるか。14話で示唆されているエトスの多くは、教育勅語の徳目を意識した修身科の徳目と重なるものであることがうかがえる。例えば、『花見車』は「親孝行」、『兄弟喧嘩』は「兄弟仲良く」などである。

こうした明確なエトス以外にも、描かれた子どもたちからは、次のような模範的要素が見える。それは、貧しい環境下での労働と学校での学問を両立させる〈労働倫理〉である。（今後、論文として公開できるように準備をしている。）

③福沢諭吉が示す、望ましい〈子ども〉像

本研究課題では、学校教育と家庭教育の各立場及び両者の相互的影響関係を視野に入れて〈良い子〉像を考察するという立場をとっていた。しかし、〈良い子〉というのは、誰にとっての〈良い子〉か。各立場によって異なる。政府側の教育観はこれまでに一定の研究の蓄積があるが、家庭教育側の教育観は整理が必要であった。そのため、様々な資料を分類・分析するにあたり、特に家庭教育側に存在するテキストを分析する際に軸となる分析の視点が課題となった。

そこで、この観点を深める必要があると判断し、次の点を研究に含めた。近代日本に新たに出現した〈家庭〉とその構成員である〈子ども〉には、どのような子ども像が目指されていたのか。近代日本の〈家庭〉に関する福沢諭吉の言説に注目し、資料の収集と分析に着手した。現在、研究作業中である。

(2) インパクト、位置づけ

本研究課題の知見は、童話や例話の中に出てくる「子ども」（良い子）がどのように描かれているかを捉えるという点で、近代日本の子ども観や修身教育に関する先行研究を補うものであ

る。加えて、坂本麻裕子（2012）「修身教育の形成と近代的エートス—寓話・童話・昔話における〈子ども〉の役割—」で明らかにした知見に、新たな知見を加えるものである。

(3) 今後の展望

資料収集に必要な調査時間が十分に確保できず、予想よりも時間がかかってしまった。現在、分析作業中の文献が複数ある。また、③で示した次の課題も見えている。今後は、これらを整理して順次発表し、その知見を社会に還元していく所存である。

参考文献

- 唐澤富太郎(1956)『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』創文社
河原和枝(1998)『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想—』中央公論新社
坂本麻裕子（2012）『修身教育の形成と近代的エートス—寓話・童話・昔話における〈子ども〉の役割—』（名古屋大学、博士学位論文）
重信幸彦(2003)『〈お話〉と家庭の近代』久山社
日本児童文学学会編(1997)『児童文学の思想史・社会史』東京書籍
府川源一郎(2014)『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究—リテラシー形成メディアの教育文化史—』ひつじ書房
向川幹雄(1992)「〈童話〉語義考—明治時代—」『児童文学研究』第24号、日本児童文学学会、pp. 57-66
牟田和恵(1996)『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性—』新曜社

1 以下の二つである。坂本麻裕子（2012）「修身教育の形成と近代的エートス—寓話・童話・昔話における〈子ども〉の役割—」、博士学位論文。坂本麻裕子「明治期の初等修身教科書に採用された寓話・童話・昔話のエートス分析的研究」、文部科学省科学研究費（平成25年度～27年度）。

2 資料の収集に当たっては、ジゼル・サピロ（2017）『文学社会学とはなにか』（鈴木智之・松下優一訳、世界思想社）、目黒強（2019）『〈児童文学〉の成立と課外読物の時代』（和泉書院）の視点も参考にした。

3 資料の存在は、宮武武骨『明治演説史』（文武堂、大正15年）が指摘した。教育分野の先行研究として、府川源一郎（2014、p.1024）が挙げられる。子供演説という形態の読み物を収集し、その存在を一覧で示した。

4 松山雅子「仮作物語 解題」『日本の子どもの本100選 1868年～1945年』、財団法人大阪国際児童文学館、<http://www.iiclo.or.jp/100books/1868/htm/frame020.htm>（2023年6月1日閲覧）。木村小舟『少年文学史—明治篇 下巻—』（昭和17年、童話春秋社）にも詳しい。

5 「尋常小学修身書編纂趣意書」明治43年度以降使用。（仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫、前掲書『近代日本教科書教授法資料集成 第十一巻 編纂趣意書I』、102頁）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------